Il bambino di cielo.～大空の子～

志波夏　日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉｌ　ｂａｍｂｉｎｏ　ｄｉ　ｃｉｅｌｏ．～大空の子～

【Ｎコード】
Ｎ８８６９Ｋ

【作者名】
志波夏　日和

【あらすじ】
公園に遊びに来ていた綱吉はいつものどたばた騒ぎで、ランボの１０年バズーカに当たってしまう。しかしそこに現れたのは、幼い綱吉だった……？　そこには雲雀さんもいて、小さな綱吉にどう対応するのか？　そして綱吉が小さくなった理由とは？

（前書き）

初めて書いた作品です！
読みづらいところもあると思いますが、読んでくださると嬉しいです！

それでは、どうぞ！

春の暖かな風が吹き渡る、よく晴れた土曜日の午後。
並盛町にある沢田家の綱吉の部屋に、一人の男がいた。
「で……できた……」
丸い影が部屋の中でそう呟いた。
手に持った紫色のバズーカを見て、口元に笑みを浮かべていた。

「はぁ、なんで俺が日曜日にガキの面倒見なきゃなんないんだよ……」
やわらかそうな茶色くふさふさした髪が風に揺れている。
27のロゴの入った水色のパーカーとベージュのズボンを身に着けた少年は、誰に向けてでもなく、一人ぼやいていた。
日曜日、その少年綱吉はリボーンとランボとイーピンを連れて、並盛町にある公園に来ていた。
「仕方ねぇだろ。ママンはお前と違って家事で忙しいんだぞ。いつも何もしてねぇんだから、日曜日くらいママンを助けると思ってガキの世話くらいするんだな」
ベンチに座った綱吉のすぐ隣から、そんな言葉が聞こえた。
綱吉の独り言に答えたのは全身真っ黒なスーツに身を包み、帽子にカメレオンのレオンを乗せた赤ん坊、リボーンだった。
「うっ……ま、まあ、そうなんだけど……」
その通りなので綱吉は何も言えない。綱吉は抵抗するのを諦めたように肩をすくめた。
そして無邪気に遊んでいる子供たちに目を向ける。
一人は牛柄の気ぐるみを着て綿菓子のような髪の5歳の男の子、ランボ。もう一人は中国服を着て卵形の頭の頂点に三つ編みを垂らしている女の子、イーピンである。

2人は元気に追いかけっこをしていた。
「おーい、お前らあんまり遠いところまで行くんじゃないぞー」
放っておくとどこまでも行きかねない2人に、そう注意すると再びリボーンに目を戻した。
「お前は遊んでこないのか？」
「俺をガキ扱いするとはいい度胸だな……ツナ」
綱吉のその一言にリボーンは口の端をにいっと押し上げて笑うと、懐から慣れた手つきで拳銃を取り出した。
そして静かに銃口を綱吉に向ける。
「わ、わかった！　悪かったよっ、ガキ扱いして！」
ひいっと赤ん坊に怯え、謝る少年の姿は傍目から見れば奇妙な光景だった。

しばらくして、ランボがイーピンとの遊びに飽きたのかベンチにいる綱吉のもとにやって来た。その後からイーピンもやって来る。
「ツナ～、飽きちゃった。なんかちょうだい」
そうせがむランボに、仕方ないなぁ、と言いながら、綱吉は2人のおやつにと母に持たされた飴をランボとイーピンにやる。
「おぉ～！ブドウ飴だ！」
「ツナサン、アリガト」
「イーピンは偉いな、ちゃんとお礼が言えて。ランボもちゃんとお礼を言えるようにならなきゃダメなんだぞ」
綱吉は2人にそう言った。
（本当に俺……日曜日のパパみたいになってる……）
そんな自分に情けなくなって、綱吉はため息を吐く。
「ランボさんはそんなこと言わなくていいんだもんね～」
と反抗しながら、ランボは綱吉の横で気持ちよさそうに寝ているリボーンに気がついた。するとランボは何か面白い事を思いついたのか、悪いことを企んだような顔をする。
「リボーン！　おれっちと勝負しろ！」

寝ているリボーンにそう言うと、ブロッコリーのような形をしたもじゃもじゃの頭の中からひょいっと手榴弾を出す。
だが、リボーンは鼻風船を膨らませながら寝たままで、全く反応しない。
「おい、ランボ！　こんな所に来てまでやめろよ！」
「ランボ、ダメ」
綱吉とイーピンが叱るも、ランボは「知らないもんね～」と取り合おうとしない。
「食らえ～っ」
ランボが手に持っていた手榴弾をリボーンに向かって投げつける。
ぱちん、とリボーンの鼻風船が割れた。
と同時に「うぜぇ」の一言とリボーンの蹴りが、ランボの投げた手榴弾ごとランボに唸りをあげてヒットした。
そのままランボは蹴られた方向に真っ直ぐ飛んでいった。その後をイーピンが追いかける。
「ふん」
「あーあ……」
リボーンは鼻を鳴らし、綱吉は溜め息を吐いた。

「君達何してるの？」
突然、綱吉達の背後から声がした。
その声を聞いて綱吉が全身氷漬けにされたかのように固まっていると、その声の主のほうからこちら側にやって来た。
「ひ、雲雀さん……」
綱吉はびくびくしながらも、やっとそれだけを言うことができた。
そう呼ばれたのは、いつもの学ランではなく青いTシャツに黒いズボンをはいた漆黒の髪の少年、雲雀恭弥だった。肩にはいつものように黄色い小鳥を停まらせている。
「何群れてるの？」
「む、む、群れてません！」

その雲雀の一言に、綱吉は手をぶんぶんと顔の前で振りながら慌てて否定した。
緊張した雰囲気の中、隣から声が聞こえてきた。
「ちゃおっス、雲雀」
「やあ、赤ん坊。また勝負しようよ」
「また今度な」
完全に怯えている綱吉をよそに、のんきに会話をするリボーンと雲雀。
「雲雀さん……日曜日は学ランじゃないんだ……」
注意が自分から外れたので、少し落ち着いた綱吉はそう呟いた。
「何、悪い？」
その呟きが聞こえたらしく、雲雀が綱吉の方を向いて訊いてきた。
「い、いえ！　ただ珍しいなぁ、と思って」
そう言って綱吉は苦笑いを浮かべた。本当に珍しかったらしく、綱吉はまだ雲雀を眺めている。
「あんまり見てると、咬み殺すよ」
少しイラついてきたのか、雲雀がむすっとした顔で言った。
「はいっ、分かりましたっ」
綱吉は再び震えながらそれだけ言って、視線を雲雀から離した。
そのやりとりを見ていて、リボーンは何かいいことを思いついたのか、
「先に帰ってるぞ」
と言って、すたすたと綱吉達から離れていく。
「えっ、リボーン帰っちゃうの？」
情けなく震えた声を出しながら綱吉がリボーンに声をかける。
（いい機会だ。守護者と親睦を深めておくんだな、ツナ）
「じゃあな、雲雀」
「またね、赤ん坊」
去り際にそう言い残したリボーンに雲雀は挨拶を返して、リボーンは帰っていった。

「が・ま・ん……」
よく聞くおなじみの台詞が、綱吉達の足元から聞こえてきた。
ふと綱吉が自分の足元を見てみると、そこには案の定泣きべそをかき綱吉のズボンのすそを握ったランボがいた。
なんとか立ち直ってここに戻ってきたらしい。
「ぐぴゃあああああ」
ここまで泣くのを我慢していたようだが、やはり限界だったようで泣き出してしまった。そして例によってスポンジのような黒い頭から、紫色の１０年バズーカを取り出した。
が、いつもと違ったのはそのバズーカの向きが逆さまだった事だ。
それに気づかずにランボは１０年バズーカの引き金を引いた。
当然、その弾はランボには当たるはずもない。弾はランボと向かい合うように立っていた綱吉に向かって飛んでいった。
「え……えっ！」
驚いて綱吉が声を上げるも、気づいた時にはもう避ける暇はなかった。
そして綱吉に１０年バズーカが命中し、綱吉は煙に包まれた。

本来ならば、１０年バズーカはその時から１０年後の自分と5分間入れ替わるものである。
次の瞬間、現れたのは１０年後の大人びた綱吉……ではなく、きょとんとした4歳ほどの幼い綱吉だった。
間の抜けた空気がその場に流れる。
「！」
さすがの雲雀も予想外の光景に驚いたらしく、珍しく固まっている。
「あらら～？　ツナ、赤ちゃんになっちゃったのかしら～？」
その原因の張本人であるランボは機嫌を直していた。そして驚く様子もなく、からかうようにそう言いながら、ペタンと座りこんで

いる幼い綱吉の周りをくるくると回り始めた。
オレンジ色のパーカーと、水色の半ズボンという出で立ちの綱吉は状況を理解しておらず、相変わらずきょとんとしたままである。
しばらくすると、ランボは飽きたらしくリボーンを探してどこかへ行ってしまった。

取り残されたのは固まっている雲雀と小さくあどけない綱吉だけである。
しばらく沈黙が流れる。やがて綱吉がきょろきょろと周りをま見回し、見知った顔がないのを不安に思ったのか、ぐずり始めてしまった。
雲雀が迷惑そうに眉をひそめると、その表情を見た綱吉は怖くなったのかさらに泣き出してしまった。
その重い雰囲気を察してか、雲雀の肩に乗っていたヒバードが飛び立ち、泣きじゃくっている綱吉の周りを飛び始めた。
「みーどーりたなーびくーなーみーもーりーのー……」
旋回しながら雲雀の愛する並盛中校歌を歌い始める。
その甲高い声に綱吉の注意が引き付けられ、そして泣き止んだ。
自分の周りを歌いながら旋回する黄色い小さな小鳥を目で追いかけはじめた。
「きゃっ、きゃっ」
と、やがて綱吉は子供特有の、高くかわいらしい声で笑い出した。

歌い終わったヒバードは花弁が舞い落ちるように雲雀の肩に停まる。
ヒバードを目で追っていた綱吉は自然とその停まった先、立ったままの雲雀の顔を見た。一瞬先ほどの怖さを思い出したように表情を曇らせたが、次の瞬間には雲雀にもぎこちないがやわらかい笑顔を見せた。
雲雀はそんな綱吉のコロコロ変わる表情を見て面白く思ったのか、

わずかにふっとその顔に笑みを浮かべた。
綱吉はそれを見逃さなかった。
綱吉は気を許したように、さらに人懐っこい満面の笑顔を雲雀に見せた。

「ぼく、つなよし」
突然、綱吉は自己紹介を始めた。
「お兄ちゃんは、だあれ？」
「僕？　僕は……恭弥」
質問をしてきたので、自分の目線よりだいぶ低いところにある綱吉の目線に合わせるように雲雀は公園の芝生に腰を下ろした。
幼い子供にフルネームで言っても仕方ないと思った雲雀は、なぜか苗字ではなく名前を名乗っていた。
「恭弥お兄ちゃん。……この鳥さんは？」
「この子はヒバード」
綱吉は子供らしく目をキラキラさせながら、次々と質問をしてくる。
ふと綱吉は疑問に思ったことを口にした。
「お兄ちゃんはここで何してるの？」
子供にこんなことを言っても分からないだろう、と思ったがうまい言い方が思いつかなかった雲雀は、そのまま言うことにした。
「僕はこの並盛町の見回りをしてるんだ」
「ふうん？」
案の定、雲雀の答えがよく分からなかった綱吉は、大きな目を輝かせた不思議そうな表情でこちらを見つめている。
やがて、さほど気にならなかったのか、綱吉は次の言葉をつむぎ出すために口を開く。
その言葉を聞いて雲雀は少し目を見開いた。
「ぼくね、さっきの鳥さんの歌ってたお歌、好きだよ。いいお歌だ

ね」

そう綱吉は、ふんわりとした笑顔で雲雀に言った。

自分の愛する校歌を褒められて嬉しかったのか雲雀は表情を緩める。

そして綱吉はひょいっと立ち上がり、雲雀の肩を飛び立ったヒバードと再び遊び始めた。

くるくるとヒバードは綱吉の上を旋回する。それを追いかけるように、綱吉もぱたぱたと走り回る。

そうしているとヒバードは綱吉のふかふかした暖かそうな頭の上にぽんっと乗った。

「ぼくね、つなよしっていうんだよ。よろしくね～ヒバード」

「ツナヨシ！　ツナヨシ！」

さっそくヒバードは覚えた綱吉の名前をを連呼する。その甲高い鈴のような声は公園のよく晴れた空に響き渡っていった。

綱吉のよく響くかわいらしい笑い声も一緒に。

そんな一人と一羽の微笑ましい様子を雲雀は黙って見つめていた。

だが、最初と違っていたのはその眼差しは少しやわらかいものになっていた事だった。

（これが……大空か）

雲雀には、今まで綱吉には感じていなかった感情が芽生えていた。

しかし、雲雀にはそれが何なのかはっきりとは分かっていなかった。

それは？守りたい？というものである。

この瞬間、雲雀の中で守りたいものの中に綱吉も含まれたのだった。

全てを包み込む大空の素質は幼い綱吉にも顕れていた。

しばらくして、突然綱吉は何かを察したようにふっと顔を上げ、雲雀に笑顔を向けた。
「ありがとうね、恭弥お兄ちゃん」
その言葉を合図としたかのように、どこからともなく真っ白な煙が現れた。その中から出てきたのはこの時代の綱吉だった。
（ああ、もう5分経ったのか……）
もう先ほどのように途惑うことなく、冷静に雲雀はそう判断した。
幼い綱吉が現れたときと同じように、中学生の綱吉はきょとんとした表情を浮かべている。
（はぁ、元の時代に戻ってきたのか）
やがて自分の状況を理解し、綱吉は安堵のため息を吐いた。
綱吉は辺りを見回し、自分のすぐ傍に座っている雲雀に気がついた。
「あわわわわ！　ひ、雲雀さん！？　……あ、あの、俺、迷惑かけませんでしたか？」
少しおどおどしながら、青い芝生の上にちょこんと正座をした綱吉は雲雀に尋ねた。
「いや……」
予想外の反応だったので、綱吉は面食らってしまった。絶対いつもの「咬み殺すよ」などの機嫌が悪いときの反応が返ってくると思っていたのだ。
「そ、そうですか。良かった。……あ、やっぱりこっちに小さい俺が出てきました？」
「……ああ、どういうわけかね」
「あ、ありがとうございました。俺の面倒見てくれて……」
傍にいた、ということはそうなんだろうと綱吉は判断してそう言った。
言うと同時に、綱吉は雲雀に素直なやわらかい微笑みを投げかけ

た。
その笑みは先ほど雲雀が見た１０年前の幼い綱吉のものと同じ、暖かく包み込むような笑顔だった。
すると雲雀は、いつもは絶対見せないような優しげな笑みを綱吉に向けた。
「やっぱり面白いね、君」
そう言った後、じゃあね、と言い残して雲雀は公園から去っていった。
綱吉はその言葉と笑顔の意味が分からず、当惑した表情を浮かべながら雲雀を見送った。

（何のことだったんだろう？　ってか、雲雀さんのあんな顔初めて見たなぁ）
綱吉が芝生の上でそんなことを考えていると、視界に三つ編みの髪がちらついた。
視線を下げるとそこには、ランボを探しにいったはずのイーピンがいた。どうやらランボを探しに行ったが、見つからなかったので仕方なく綱吉のもとに戻ってきたらしい。
たぶんランボはもう家に帰ってると思うよ、と告げるとイーピンは置いていかれた子犬のような顔をしてしょげてしまった。
ランボに置いていかれたことがショックだったようだ。
「じゃあ帰ろうか、イーピン」
そういって綱吉はよいしょっ、と立ち上がった。
ちょっとかわいそうだったので綱吉はイーピンを抱き上げて公園を出ていく。
「ツナサン、アリガト」
「いいんだよ」
本日二度目のイーピンのお礼を聞きながら、綱吉は別のことを考えていた。
（もう少しイーピンが来るのが早かったら、雲雀さんを見て筒子（ピンズ）時

限超爆が発動してたんだろうな……）
そう考えた綱吉は背筋がぞっと冷えた心地になる。
そんな2人の背中を明るい温かな夕日が見送っていた。

「ただいまー」
綱吉がイーピンと共に沢田宅に帰ってきた。
綱吉が玄関の扉を開けると同時に、目の前に丸い頭が見えた。
「すみませんでしたっ！」
「「！」」
突然のことに驚いた綱吉は、無意識に半歩下がる。
ボンゴレのメカニックであるジャンニーニが玄関先で平謝りをしてきたのだ。
ぽっちゃりした体型に、左右で大きさの違う真ん丸い目を持ち、宇宙船のようなものに乗っているジャンニーニはそのまま頭を下げ続けている。
「「？」」
あまりに唐突だったため、綱吉もイーピンもわけが分からずぽかんとしている。
「ど、どうしたの？　ジャンニーニ」
とりあえず状況が分からないので綱吉は訳を訊いてみた。
「実は……」
と、ジャンニーニは伏し目がちに今までの事実を話し始めた。

時は一日前の土曜日、ジャンニーニはリボーンに依頼されていた銃の補充に来ていた。
今綱吉の部屋にいるのは、リボーンとジャンニーニだけである。
綱吉たちはみな一階のリビングで昼食をとっている。
「ご苦労だったな、ジャンニーニ。もう帰っていいぞ」
「はい、いつもご贔屓（ひいき）にしてくださってありがとうございます。そ

れでは失礼します」
目的が果たされ、別れの挨拶を済ませたリボーンは昼食をとるために一階へと降りていった。
ジャンニーニもその後すぐに帰ろうとしたのだが、ふとそこにあったすみれ色をした長さ１m弱のバズーカが目に飛び込んできた。
そのバズーカはランボが昼食前に遊んでいて、仕舞い忘れていった１０年バズーカであった。
バズーカを見た瞬間、ジャンニーニの目はきらきらと輝いていた。
ごくり、と物欲しそうな目でそれを見つめる。
（ずっと……改造したいと思っていたんですよね……）
しばらく無言のまま自分の感情を押さえ込むかのようにバズーカを見つめていたが、やはり我慢できなくなったジャンニーニはゆっくりと手を伸ばした。

「で……できた……」
ジャンニーニは満足そうな顔で手に持ったバズーカを見つめる。
ミスがないか確認しようとしたその時、昼食を終えたランボが部屋に入ってきた。１０年バズーカを忘れていたことを思い出したのだ。
慌ててジャンニーニはバズーカを、さっと元の位置に戻す。
さすがに無断で改造したことがばれては、気まずい雰囲気になると思ったのだ。
「ランボさんボスから預かった大事なものを忘れていったんじゃないんだもんね。わざと置いていったんだもんね～」
苦笑いをしながらそう弁解したランボは、ジャンニーニの存在には目もくれず、真っ直ぐ自分の忘れ物の所に寄っていく。
そして真ん丸い雲のような髪の毛の中にバズーカを突っ込んだ。
その光景を見ていて、どこにそんな自分より大きなものが入るのだろう、とジャンニーニはつくづく不思議に思った。ランボの大きさはそのバズーカの半分くらいなのだ。

ランボはそれを仕舞い終わると、初めて自分以外の存在に気がついたようにジャンニーニを見た。そして怪しむような目でジャンニーニを眺める。
「お前～！　ランボさんのものに触ってないだろうな～？」
「い、いえ……触っておりませんよ！」
子供相手に何を怯えているのか、ジャンニーニは裏返った声を出した。しかしそのことに気がつかなかったランボは、それを聞いて安心したのか、下の階に遊びに行ってしまった。
ランボが行ってから、仕方ないので自分のした作業をひとつひとつ思い出し、バズーカのチェックをしてみる。
するとジャンニーニの顔は、はっとしたかと思えば次はみるみるうちに青ざめていった。
自分のミスに気がついたのだ。

ジャンニーニは自分では10年バズーカの効果時間を5分から15分へと、つまり10分間延ばそうと思っていた。
しかし、いじる所を間違えてしまった。
そのため本来10年後の自分と入れ替わるはずが、10年？前？の自分と入れ替わることになってしまったのだ。
要するに？10年逆バズーカ？という物になったという事である。

ジャンニーニはランボに、綱吉が10年バズーカに当たったら小さい綱吉が現れた、ということを聞いて綱吉に謝ってきたのだった。
「なるほど、自分が勝手に改造したあげく、その改造も失敗したからそれを言うに言えなかった……というところか」
ジャンニーニの説明が終わり、いつの間にか傍に来ていたリボーンが腕を組みながら冷静に解析した。
「はい……すみませんでした」
そのリボーンの言葉にさらにしゅん、とうなだれるジャンニーニ。

「ま、まあ、失敗は誰でもあるし、そんなに気にしないで。オレは何ともなかったんだし」
その様子に、だんだんジャンニーニがかわいそうになってきた綱吉が言った。
ジャンニーニはその言葉に目を涙でいっぱいにして綱吉を見つめる。
「ありがとうございます！　バズーカはちゃんと直しておきますので」
そう言って笑顔になったジャンニーニは、ランボを連れて二階へと上がっていった。イーピンもその後に続く。
「まったく、目を離すとろくなことにならないな。あいつは……」
隣でリボーンが呆れた声で言った。
あはは、と苦笑しながら、玄関に立ったままの綱吉はつい先ほどの出来事を思い出す。
（大変だったことは大変だったけど……）

綱吉はその１０年逆バズーカで１０年前に飛ばされた。１０年前なのだから、もちろんまだ幼い綱吉の傍には誰かがついていたわけである。
当然のようにそこには綱吉の母親、奈々がいた。
が、運が良かったのか綱吉に背を向けていたために、いきなり中学生になった息子に気がつかなかった。
綱吉はタイムスリップした衝撃に一瞬呆けたが、すぐに冷静さを取り戻して近くにあった茂みに姿を隠した。
「あら？　ツッ君どこ～？」
やがて小さな息子の姿が見えないことに気がついた奈々は辺りを探し始めた。
――そのまま5分間、もとの時代に戻るまで綱吉は必死に身を隠していたのだ。

その苦労を思い出して綱吉は、ため息を吐き出す。
しかし、でも、と言葉をつむぎだした。
「悪いことばかりでもなかったかなぁ」
戻った時に傍にいてくれたことも嬉しかったが、特に去り際に一瞬見せた雲雀の笑顔に、今までにはなかった温かさを感じたのを思い出して。
「雲雀といいことがあったみたいだな」
ひょいっと肩に乗ってきたリボーンが、ニヤリと笑みを浮かべながら話しかけてきた。
「うん。これからは、雲雀さんともうちょっと仲良くやっていけるといいなぁ」
リボーンの言葉に答えてから、綱吉は遠くを見つめて温かく微笑んだ。
綱吉は前より少し雲雀の印象がやわらかくなったのを感じていた。
そして、リビングへ歩いていく。その背中はいつもより明るく見えた。

孤高の浮雲は決して自分からは歩み寄ろうとはしない
でも離れもしない
離れも近づきもしないのならば
自分から歩み寄ればいいのだ
全てを包み込む大空の心で

地上からは手を伸ばしても届かないくらい
遠くに存在する雲だけれど
それは……
大空にとっては近いということなのだから

（後書き）

本当に文章力とか無いんで、読みにくいとかあったらごめんなさい！
思いつくままに書いてみたんですが、キャラとか上手く表現できてないかもしれないです。（……雲雀さんとか、動かしにくい！！）
ここまで読んでくださって、ありがとうございました！
願わくば、またお会いできんことを……。

わお！！お気に入りにしてくださった方がいらっしゃる！
感謝です、ありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8869k/

Il bambino di cielo.〜大空の子〜

2010年10月8日10時35分発行